

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準	自己評価		学校関係者評価		改善策						
						達成状況	評価	評価	評価							
① 学習指導	確かな学力の育成	授業を中心とした生徒の興味・関心・意欲が高まる。しかもわかる授業を展開する。支援・援助の必要とする授業内容では、TT指導や学習支援員の効果的な活用できめ細かな指導を目指す。また、授業教材研究に努め、ワークシートや資料の工夫、ICT教育機器の有効な活用を図る。学力を高める上で家庭学習課題や課題プリント・副教材の演習問題など積極的に提示し、実施の有無の確認や評価を必ず実施する。	生徒の興味・関心・意欲が高まる。わかる授業づくりに取り組む。TT指導や学習支援員の積極的な活用と授業教材やICT教育機器の有効活用を取り入れる。	最初「めあて」を提示して授業に臨み、説明を聞く場面、思考する場面、表現や発表する場面を明確にし、生徒が授業で、思考・判断・表現する力を育成する。授業の終わりでは「自分の振り返り」を行うことで、授業理解度や自己課題をはっきりさせ、家庭学習や次時の授業につなげていく。	A	教員の授業実践力が向上し、生徒の興味・関心・意欲を高め、わかる授業が展開され、ともに、学級全体が学習へ向かう態度が向上し、生徒の自己学習力が向上している。	研究部が示している授業のはじめに「学習のめあて」を提示することで、授業の内容を明確にし、学習意欲を高め、終わりの「振り返り」をすることで、授業内容の理解度や学習意欲の自己評価をさせた。それらのことが次の授業や家庭学習にいかされ、実りある江津中の授業スタイルの確立をさらに高めていった。 今年度は、緊急事態宣言中の臨時休校になったときの未学習分の解消を急ぎ、理解が不十分なまま進むことを予防するために、昨年度以上にわかる授業づくりを心がけた。各教科間での情報交換、綿密な教材研究、家庭学習につながるわかりやすい授業ワークシートや演習問題プリントの工夫と作成、副教材等の資料、実物投影機や教具を活用した授業を実践してきた。 各教科間では、公開授業と授業研究を実施することで、教員の授業力向上を図った。また、積み重ねの教科や実技を伴う教科では、TT指導や学校支援員の活用を図り、よりきめ細かな指導が行き届くよう心がけた。 言語活動を充実させる思考力、判断力、表現力を育成するために、学習内容に応じて、言語活動場面を取り入れ、既習の知識・技能を活用して自分の考えをもち、根拠を挙げながら記述したり、ホワイトボードや実物投影機などを使用して発表し合ったりすることで、より深い理解へと導いていった。	B	「学習のめあて」の提示と、「振り返り」の実施により、生徒へ自己評価を求める方法が実践され、本校の授業スタイルが確立されてきているようだ。チームティーチングや支援員等の活用により、生徒に対してきめ細やかな指導が行き届いている様子がうかがえる。 今年度はコロナ禍の中、臨時休業や予定変更など例年とは異なる対応が必要となり、授業の進め方に非常に苦心されたが、公開授業や教材研究、副教材や教具の活用工夫など、昨年以上に生徒に分かる授業づくりを心掛けられ、十分成果が表れていることは大いに評価できる。臨休が続いた中でも、授業時数や単元を計画的に実施されたことに感心した。生徒からも授業の進め方や内容がよくわかるとの声も多く、教員同士でコミュニケーションを図り、生徒の学力向上に努め、昨年度以上に意欲的に教育に対して実践している。学ぶことの楽しさはもちろん大切だが、なぜ学ぶのか、将来の人生にどのように役立っていくのかを理解できるような授業展開もぜひお願いしたい。	A	引き続き、全ての授業で「学習のねらい」を明確に提示し、「振り返り」を大切にすることを継続する。そのことを通して江中授業スタイルの確立していく。 また、わかる授業を進める上で重要な教材研究に力を入れていき、教員相互の情報交換、T2及び支援員との連携などにも力を入れていく。話し合い活動で自分の考えを伝え合い、深め広げる授業づくりを通して、生徒の「学ぶことの楽しさ」を高めていく。 「学び」を知識や技術の習得、学校教育だけで閉じることがないように、社会に開かれた学びになるようにキャリア教育も引き続き力を入れて推進していく。					
					A	各教科担任および各学年で家庭学習課題の提示・評価を継続して行い、家庭学習習慣が定着している。(平日90分超、テスト期間120分超)						自学ノートの取組は、今年度も全学年で実施した。各学年部教員または学習指導員が毎日チェックと激励をし、継続できるように支援をした。そして、継続することで家庭学習の重要性を伝え、自学ノートの取組を家庭学習として習慣化させることができた。 授業では学習効果を高めるために、次時の授業内容を授業終了時に提示し、予習をうながした。また、授業内容の確実な定着のために、副教材の課題を提示し確認したり、課題プリントを配布したりした。さらに今年度は、3学期の1月に5教科において実施していた単元テストを中間テストに位置づけ、1、2年生で実施した。部活動を中止して家庭学習の時間を確保し、2学期の期末テストからの期間も短く、気持ちを緩めることなく、単元テストより意欲的に取り組むことができた。 家庭学習時間調査【資料1】は、今年度も12月の県学力調査直前に実施した。1年生では64分、2年生では41分、3年生では94分であった。昨年度の調査に比べ1年生で1分増、2年生で22分減、3年生で4分減となり、2年生のみ家庭学習の時間が大幅に減っていることがわかった。3年生が、他学年と比べて多いのは、部活動もなく、進路希望決定の時期でもあり、受験に向けて学習時間が多くなっているためと思われる。しかし、2年生は昨年の2年生と比べても、自分たちが1年生のときと比べても20分近く減っており、テスト期間でないときの学習に対する意欲のなさを表している。各学年部及び各教科担任が積極的に家庭学習の課題を提示するのはもちろんであるが、実施の有無の確認とその評価をし、していない生徒には補充学習や補充課題プリントの提供が必要だと思われる。特に2年生に対してはより一層家庭学習の課題を提示する必要がある。家庭学習が充実すればその効果が授業でも発揮できるので、具体的な方策を生徒に示し取り組ませたい。	B	ここ数年継続して行っている自学ノートの取り組みは、生徒に家庭学習の重要性を伝えることができ、その定着化が進んでいることがわかる。3年生の家庭学習については言われなくても自分で計画的に勉強している割合が大きく伸びてきていることで、生徒が次の授業にスムーズに入っていることで教師には継続して支援してほしい。本年度は臨時休業があり、また部活も中止の時期が長くあり、家庭で学習する時間が多かった。各自計画を立てて学習に取り組んだことは家庭学習の習慣づけの良さきっかけになったのではないかとと思う。 資料から現1年生はよく家庭学習をしているようだ。2年生の家庭学習への取組は、データを見る限りかなり物足りない。生徒の家庭学習の取り組み方にも問題があるとは思いますが、無理のない範囲で補習や宿題を継続して提供することが必要と思われる。例年2年生は家庭学習時間が少ない傾向にあるが、今年は数学的にも顕著に表れている。来年度は3年生。今一度家庭学習の重要性を徹底して教える必要がある。 県の学力調査の「生徒がやってきた宿題を丁寧に見て返してくれる」という項目の肯定的な数値が昨年度より大幅に減少している。生徒の意欲を削ぐようなことはせずに、一人一人に対してよりきめ細かな対応を切に願う。		
					B	家庭学習の提示と確認・評価を継続しているが、生徒の家庭学習時間にバラつきがあり、全体としては家庭学習が習慣化している。(平日60分超、テスト期間90分以上)									B	自学ノートについては、今年度途中から学習指導員が毎日チェックをしている。今までは、学年部でチェックをしていたため、指導員と学年部との情報交換も必要だと感じている。頑張っている生徒を学年部の教員に伝えてもらい、声をかけることで意欲の向上につながると考える。 また、家庭学習の時間が少ない生徒については、昼休憩や放課後に時間を取って個別指導や補習ができればいいと考えている。長期休業中や3年生の部活動が終わった2学期から時間のとれるところで考えていきたい。進路に向けて力をつけていくという意識を高めていくこと、少しでも勉強がわかるという体験をさせることで、意欲の向上につながりたい。
					C	家庭学習の定着が不十分であり、全体として家庭学習が停滞傾向である。(平日60分未満、テスト期間90分未満)										
D	家庭学習の重要性を意識せず、全体として家庭学習時間が不足しており、習慣化にはほど遠い。(テスト期間でさえ60分未満)	B	自学ノートについては、今年度途中から学習指導員が毎日チェックをしている。今までは、学年部でチェックをしていたため、指導員と学年部との情報交換も必要だと感じている。頑張っている生徒を学年部の教員に伝えてもらい、声をかけることで意欲の向上につながると考える。 また、家庭学習の時間が少ない生徒については、昼休憩や放課後に時間を取って個別指導や補習ができればいいと考えている。長期休業中や3年生の部活動が終わった2学期から時間のとれるところで考えていきたい。進路に向けて力をつけていくという意識を高めていくこと、少しでも勉強がわかるという体験をさせることで、意欲の向上につながりたい。													

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準	評価		学校関係者評価		改善策	
						自己評価	状況	評価	評価		
①学習指導	人権・同和教育の推進	一人一人が認められ、差別や偏見を許さない人権感覚と実践力を養い、いじめのない学校をつくる。	自他の人権を尊重し「差別をしない生き方」ができる力を育てるために、人権集会や人権講演会、人権宣言づくりを通して、生徒が考える場を設定する。	<p>・人の個性を認め、助け合いながら生活していくことについて考えるきっかけとなる場として、人権集会や人権講演会を実施する。</p> <p>・生活しやすい江津中になるように、江津中の人権宣言をつくる。</p> <p>・日常の生徒の様子に応じた指導、助言をする。</p>	A	人権集会や人権講演会を通して、生徒が個性を尊重した生き方について考える。江津中人権宣言が完成し、それを意識して行動する。	<p>代議員会の生徒を中心に全校で取り組み、江津中学校の人権宣言を完成することができた。生徒会のスローガンからアンケートを実施し、全校級で学級単位での話し合い活動も実施することができた。6条構成とし、5条は固定にし、最後の1条は学級ごとの条文とした。最後の1条だけ、年度更新とした点だが、当初の計画の変更点である。人権宣言を意識した行動については、働きかけや指導が不十分だった。</p> <p>コロナ禍であったが、人権講演会は実施することができた。太田明夫さんに、「二番目の悪者について～絵本を通して人権を考える～」という演題でお話をしていただいた。生徒からの質問も活発に出た。人権講演会後のアンケートで、「これからの生活に活かしていく内容を見つけることができた。」と答えた生徒が171名おり、生徒の実態に適した人権講演会が実施できたと思われる。</p> <p>人権宣言に関連した人権集会を実施予定だったが、感染症予防のこともあり、学級単位の話し合い活動になってしまった。代議員会主体で、全校生徒に人権に関係することを働きかけていくことは定着してきたので、さらに積極的な指導方法を考えていくことが、来年度に向けての課題である。</p>	B	<p>一昨年から課題となっていた人権宣言が、生徒が中心となって完成したことは大変評価できる。生徒一人一人が人権に対して深く考え、より一層人権に対する関心が高まったのではないかと思う。今後それが形骸化せず、継続した取組となるように先生方の後押しをお願いしたい。またコロナ禍の中で多くの行事が中止を余儀なくされる中、人権講演会を開催され、関係の方々のご苦労が推察される。人権講演会の際に、講師の方に生徒から質問が活発に出され、今後の生活に役立つヒントを得たと答えた生徒も約7割もいた。真剣に自分たちのこととして人権問題に向き合っている姿が見られたのは良い傾向である。</p> <p>アンケートでも「自分には良いところがあると思う」、「人に認められていると思う」などの項目で肯定的な意見が多く見られ、他者を思いやり、もう一人の自分を見つめる優しい心を持った江津生が多くいることに安心している。また今年度のような新型コロナ感染者に対する度を越した誹謗中傷報道を見るにつけ、人権問題のテーマとして生徒たちに考えさせるのも良いと思う。</p>	B	<p>人権宣言は、固定の条文と年度更新の条文があるため、集会の機会を作り、更新の内容を考えることで意識を高めていきたい。また、代議員会を中心とした全校生徒への呼びかけを行っていくようにしたい。</p> <p>人権講演会は、人権週間に合わせて実施する伝統があるので、大切にしていきたいと考える。内容についても、生徒だけでなく、教職員へのアンケート等も実施し、課題意識につながる人権課題をテーマとして設定していきたい。</p>
					B	人権集会や人権講演会を計画的に実施。人権宣言が完成する。					
					C	人権集会や人権講演会の内容が生徒の実態と合わない。人権宣言が不完全にしかできない。					
					D	人権集会や人権講演会が実施できない。人権宣言が完成しない。					
①学習指導	学校図書館・読書活動の推進	多様な価値観に触れ、表現力や想像力を育む読書活動を推進する。	朝読書を継続して行い、学校図書館利用増を目指しての読書推進活動を充実する。	<p>「利用しやすい図書館」として、図書館利用者の増加、家庭での読書の習慣化を図る。教科書学習における図書館利用にも一層の活用を推進していく。読書ノートの活用を継続することで、充実した読書記録とする。</p>	A	図書館利用が増加し、家読が定着(家読30分以上)	B	<p>ここ数年の図書館利用状況の充実には喜ばしいことである。生徒が興味関心をもてるような本や授業で活用できる本を積極的に購入されていることにより、利用しやすい図書館になっているのだと思う。コロナ禍の中で密を回避した図書館利用は工夫が必要となると思われるが対応をお願いしたい。</p> <p>本を読むことが好きな生徒が多く、自宅で読書をする生徒も半数以上いる。家庭内で過ごす時間が増える中、その状況を「家読」の増加につなげる取組の継続を是非お願いしたい。スマホなどの情報機器に囲まれている環境下でこの数字は喜ばしい限りである。朝読書などの継続した取り組みの現れたと思う。保護者にも家でゆっくりと読書に浸るような家庭環境を作っていたいただきたい。</p> <p>読書を通して、語彙が豊富になり読解力が養われ、情緒が育まれるという効用がある。ぜひ先生方にこの時期に本を読むことがいかに大切かを教えてほしい。また家庭内の読書環境を促進していくためにも、小中連携での家読週間の導入はぜひ実践してほしい。</p>	B	<p>家読が定着するよう今後も引き続き取り組んでいきたい。学校としては、今までのように朝読書の時間を取ることで、図書館スペースの環境を整えること、本の魅力を伝えること、授業を通して読書紹介など本を紹介する機会をつくること、家読の定着につながることを考える。家読週間の導入を考えるのであれば、定期テストの時期を考慮し、他の教科の宿題を減らして時間の確保をした上で、小学校との連携も考えていきたい。</p>	
					B	図書館利用が増加し、家読が習慣化(家読10～20分)					
					C	図書館利用が増加したが、家読が不十分(10分未満)					
					D	図書館利用が増加せず、家読も不十分(10分未満)					

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準		学校関係者評価	改善策	
					自己評価	状況			
① 学習指導	言語活動の充実	「つながる力の育成」のために各授業で積極的に話し合い活動を行い、自分の考えを伝え合い、深め広げる授業づくりに取り組み、思考力・判断力・表現力の向上をめざす。	各教科等で、自分の考えをもち・伝える手立ての工夫、話し合い活動を通して考えを深める手立ての工夫をする。	全教科の授業で自分の考えをもち、考えを伝える場面の設定をする。そして、「話し合いの基本形」を活用して、各教科である程度統一した指導をすることで、生徒のグループ討議のスキルを向上させる。	A	各教科で工夫した「話し合い活動」を実施し、思考力・判断力・表現力が向上	B	B	B
					B	各教科で工夫した「話し合い活動」を実施			
					C	ほとんどの教科で「話し合い活動」を実施			
					D	「話し合い活動」の実施が不十分だった。			
② ふるさと・キャリア教育	ふるさと・キャリア教育の推進	キャリア教育の体制を整えるとともに、将来に生きる大きな夢や希望を育む。「江津の明日を創る人」を育てるために、ふるさと・地域に根ざした各種体験活動を核とした取組を推進する。	地域の教育資源（ひと・もの・こと）を有効に活用し、各学年で系統立ったふるさと・キャリア教育を推進する。	各学年で取り組む、本町探訪、修学旅行の企業訪問、事業所訪問、福祉学習、上級学校調べ、職場体験等の活動が系統的に、より一層充実するように努める。また、地域の「ひと・もの・こと」を活用することで、地域の魅力や課題の理解を進める。	A	全学年において、ふるさと・キャリア教育を複数回計画的に実施した。	B	B	B
					B	ふるさと・キャリア教育を複数回実施した学年と一回実施した学年があった。			
					C	各学年、ふるさと・キャリア教育を1回実施した。			
					D	ふるさと・キャリア教育を実施できなかった。			

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準	評価		学校関係者評価		改善策		
						自己達成状況	評価	学校関係者評価	評価			
③ 生徒指導	生徒指導の充実	教職員の共通理解・協力体制により、社会規範を遵守する態度を育成する。	養育教育を核とした生活習慣の定着とふるまい向上のため、生徒会と連携しながら指導を行う。	生徒会と連携したふるまい向上等を推進し、生徒の基本的な生活習慣、規範意識が向上する。情報モラルについては、家庭への情報提供し、特に「家庭内の約束」の遵守をめざす。	A 生活習慣、規範意識が向上し、ネットトラブル等が起きない	<p>挨拶、返事、靴揃えを基本とし、年間を通じあらゆる機会でも繰り返して指導を行った。挨拶の声はまだ十分とは言えないが、靴揃えは多くの生徒が意識して整えるようになり、良き伝統として誇れるようになってきた。また、身だしなみについても多くの生徒がきちんと整えて生活し、落ち着いた学校生活を送ることができた。</p> <p>不要物の持ち込みや反社会的な行動はなく、一人一人が規範意識を持って生活することができた。</p> <p>ネットトラブルについては、2学期に1件発生した。一時的な感情で発信(発言)したことで、不快な思いをした生徒があり、家庭と連携しながら指導を行った。外部の専門家を招き、学期に1回情報モラルについての講演を実施し、全校に対してもモラルの向上を図った。一方、例年であればPTA総会や地区懇談会等の機会を通じ、保護者に対して啓発を行っていたが、今年度についてはコロナウイルス感染拡大防止の観点から実施することができなかった。「スマホ・インターネットの家庭内の約束」が徐々に形骸化し、利用時間が守られないなど保護者の意識はあまり高まっていないことが課題である。</p>	B	「挨拶」「返事」「靴揃え」は継続した取り組みにより、江中の良き伝統として誇れるようになってきた。あいさつについては登下校時に、先に挨拶してくれる生徒も多くみられて、とても好感が持てる。学校での基本的な生活習慣はよくできていると感じるが、家庭内の生活では形骸化しており、PTAと連携して定期的に啓発活動を行うことが必要不可欠である。	B	本校では、「挨拶」「返事」「靴揃え」を継続して指導をしてきており、伝統化してきている。ただ、できているからよしとするのではなく、生徒たちがこうしたことの良きを実感できる指導を行い、家庭とも連携していきたい。		
					B 生活習慣、規範意識が向上						また、継続的に行っている情報モラルへの取組について、講演会を定期的に関き、講師の話を生徒たちも真剣に聴き、ネットトラブルの被害の実例や、ネット依存が学力や体力、体調に及ぼす影響など大方の生徒は理解しているようだ。だが生まれたときから情報機器に囲まれて育ってきた環境下では極端な規制をかけるのはもう難しいのではないかとも思う。情報モラルに関しては、家庭を巻き込んでの取組をしないと改善はできないと考える。まず親が手本を見せ、厳しい態度で臨んでもらわなければ学校側がいくら指導しようが無理があるとする。PTAと連携し、形骸化しつつある「家庭内の約束」を再検討するとともに小学校とも連携を図り、家庭への啓発を引き続き行ってほしい。またここ数年実施しているノーマディア週間だが、効果がどれほど上がったのかぜひデータがあれば示してほしい。	情報機器の扱いについては、保護者の意識が大きく反映する。今後もPTA等との連携を行いながら、情報機器の取り扱いや情報モラルについてルール作りを進めていきたい。
					C 生活習慣、規範意識が向上せず							また、ノーマディア週間のデータを毎年比較し分析していきたい。
					D 生活習慣、規範意識が下降							
④ 健康の増進・体力の向上	学校保健及び食育の推進	学校保健計画に基づいて、生徒の自己健康管理力の向上を図る。また、「食」に関する正しい知識と望ましい食習慣を身につけさせる。	疾病予防等の指導や「食」に関する指導を通して、自己管理力の向上と健やかで逞しい心身の育成に努める。	A 積極的な健康管理により、健康に配慮した朝食摂取が定着	<p>昨年度の取組で平日の朝食の喫食率はほぼ100%であった。そこで今年度は、朝食の充実に向け冬季休業中に全校生徒を対象に「朝食チャレンジ2020」という朝食に関する課題を与えた。家庭科で1、2学期に行った朝食アンケートにより8割の生徒が毎日朝食を摂っていることが分かった。昨年度より、喫食率がやや下がっているのは、調査が休日を含んでいるからと考えられる。また、食事の内容を見ると主食は7割の生徒がとっているが、主食+主菜の生徒は2割程度、主食+副菜の生徒は1割強、主食+主菜+副菜の生徒は2割強であった。これらの結果を受けて、冬季休業中に朝食の栄養バランスを考えたチャレンジを行うこととした。</p> <p>生活が不規則になりがちな年末年始という時期であったが、全体的には8割以上の生徒が自主的に取り組んでおり、朝食に一品プラスする取組には6割以上の生徒が毎日取り組んでいた。この取組を通して、普段の朝食に一品プラスするだけでも、生徒達は何を足すとよいかと考えたり、朝食を摂るために起床時間を意識したりしたようである。また、自分で味噌汁を作る、朝食の献立を自分で考えて調理する取組では、「これまでの朝食の内容を見直すきっかけとなった」「どんなものを食べればいいのか分かった」など、今後の朝食の献立への意識付けになったと考える。保護者からも「親子で朝食の大切さについて考えるよい機会になった」という感想があった。</p> <p>健康を支える朝食への意識付けは高まったものの、定着には時間がかかると思われる。今後、取組の内容や時期を検討し、栄養士と連携を取りながら、指導する方法を考えたい。</p>	B	家庭科の専門教員の方の着任により、専門性の高い取組が実施され、効果が現れているようだ。	A	朝食への意識を高めたり、内容の改善につなげたりする取り組みは継続していきたい。しかし、家庭の協力が必要不可欠であり、生徒の朝食の内容把握や家庭での実践を求める場合は、取り組みやすい冬休み似設定するなど時期と内容を考慮したい。			
				B 自己の健康管理により、健康に配慮した朝食摂取が習慣化						「朝食チャレンジ2020」の取組は生徒の健康の意識づけに大変良い試みであった。昨年度疑問であった朝食の内容がアンケートにより明らかとなり朝食の栄養バランスの悪さが浮き彫りになった。その結果を受けて、冬休みに生徒自ら朝食づくりに取り組む、朝食の重要性の意識づけができたことは大いに評価できる。生徒が朝食の重要性を意識していることは良い傾向であるが、栄養管理を考えた取組を定着させる必要がある。家庭環境の影響もあるが、これをぜひ継続的に行っていただき、すべての生徒が取り組んでいけるような活動にしていってもらえたら嬉しい。ぜひ小学校との連携も望む。	朝食への意識を高めたり、内容の改善につなげたりする取り組みは継続していきたい。しかし、家庭の協力が必要不可欠であり、生徒の朝食の内容把握や家庭での実践を求める場合は、取り組みやすい冬休み似設定するなど時期と内容を考慮したい。	
				C 自己の健康管理に努力が必要								
				D 健康管理が不十分								

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準	自己評価		学校関係者評価		改善策
						達成状況	評価	考査	評察	
④ 健康の増進・体力の向上	体力の向上	体力向上に係る体育的活動の推進に努め、生涯に渡る健康なライフスタイルづくりを推進する。	運動の合理的で豊かな実践を通して、運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにする。	健康なライフスタイルを確立するため、家庭での健康・体力づくりを行う。体育の授業に於いて保健分野からの指導など授業改善に努めていく。長期休業前、体力づくりの啓発を行い、家庭との連携を図る。	A	目標を立て計画的に健康・体力づくりを実践	今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で休校があり、運動不足が心配された。4月の休校が決まったときに、体育科で相談し、トレーニングや、トレーニング動画の紹介等を行い、運動不足の予防に取り組んだ。また、記録用紙を設けたことで、生徒が自分で計画を立て、運動に取り組んでいた。	B	B	今年のように家庭で過ごす時間が増えると生活の中に運動をどんな形でどのくらい取り込むか難しい。学校側の対応はよくできているが、長期休暇での家庭との連携と生徒の意欲につながる工夫が必要と感じる。コロナ禍の影響で臨時休業や部活動自粛等で運動不足が心配されたが、学校側の運動メニューの提示や記録用紙の配付などの試みにより、例年並みの健康・体力づくりを実施できたことは大いに評価できる。生徒自身も自分の健康・体力のことを自主的に考え、また家庭の協力も率先して体力づくりに取り組んでいたことは喜ばしい。今年度の取組を土台として来年度以降も計画的に生徒の健康・体力づくりを実践してほしい。また部活動における各種大会が中止・縮小され、目標を失いかけていく中で生徒たちは一生懸命頑張って練習に励んでいた。この経験は来年度以降必ず成果となって表れると思う。
					B	計画的に健康・体力づくりを実践（30分以上）	2学期に、体育委員会で一週間の運動時間の実態調査を行った。1年生が平均28分、2年生が平均19分、3年生が27分という結果であり、特に2年生の運動時間が少ないことがわかった。そこで、運動の種類やトレーニングの方法を示し、再度調査を行った結果、1年生が平均33分、2年生が25分、3年生が37分という結果であり、どの学年も運動を行う時間が増えた。頻度まで指定しなかったため、平均的な時間でみと増えているが、中には、1回の運動量が多く、残りの数日は0分というものもいくつかあった。			
					C	計画的に健康・体力づくりを実践（15分以上）	また、保健分野の授業では、資料選びを工夫し、生徒の実態に合う授業を心がけることができた。今後授業改善に努めていきたい。			
					D	健康・体力づくりが不十分（10分未満）	今年度は、家で過ごす時間も長く、家庭にも協力してもらい運動調査等を行うことができた。来年度は、さらに家庭との連携を深める方法を考えていきたい。			
⑤ 安全管理・指導	学校安全の推進 安全対応能力の向上	安全で安心な危機管理体制の確立に努める。	危機管理マニュアルの改善とともに、毎月安全点検を実施し危険箇所の修理等を迅速に行う。	危機管理マニュアルの見直しと、毎月15日の安全点検実施に伴い、毎月安全点検を実施し危険箇所の修理等を迅速に行う。食物アレルギー対応委員会を組織し、実態と対応を把握する。	A	マニュアル改善、点検・修繕等を迅速に実施し、安全推進	築12年になる校舎は、あらゆる所で破損・故障が見られるようになり、毎月定期的に実施している安全点検はもちろんのこと、日々の生活の中で情報交換を密にし、点検・修繕に努めている。今年度は昇降口の蛍光灯が点灯しなくなり、LEDランプに交換してもらったが、経年劣化と暴風により、校庭の防球ネットが大きく破損し、修繕を頻繁にしなければならぬ状態となっている。また、屋上に設置してあるエアコンも暴風により破損し、交換修理が必要である。大型修繕であるため、市教委と連携しながら対応を進めていきたい。その他にも水道や雨水ポンプの不具合など施設設備の故障が多くなり、必要な修繕を市教委と連携しながら、できるだけ速やかに進めていきたい。	B	B	校舎の破損や故障が年を経るにつれて顕著に見られるようになり危険箇所も増えてきた。校舎及び各種設備等の老朽化への対応は市担当課との連携を保ち、生徒の安全への担保に努めていただきたい。事故があった時には遅いので、生徒や教職員の安全を守る観点から、点検はより細かく頻繁に行ってほしい。また生徒の目からの危険箇所の調査も生徒会を中心に取り組む必要性を感じる。食物アレルギーは命にもかかわる案件なので、アレルギーを持つ生徒たち一人一人に丁寧に対応できたことは大変評価する。情報を早期に把握し、保護者や小学校とも連携し、よりきめ細かな対応を望む。また今年、病気や様々な特性を抱える生徒に対応すべく、教職員全体で研修を行い、万一の場合を想定した体制づくりができたことは本人やご家族の方も大変心強かったと思う。今後も臨機応変で横断的な対応を望む。また個人情報取扱いも危機管理の一環として盛り込むことは当然のことであり、パソコンのウイルス対策等も万全の対応をお願いしたい。
					B	マニュアルの改善、点検・修繕等を迅速に実施	危機管理では、養護教諭を中心に新入生に関してアレルギー面談の時間を設けて、丁寧に対応するなど安心安全な体制が構築されている。病気や様々な特性を抱える生徒の理解に努め、その危機対応のための職員研修を行うことで、万一に備える体制づくりを確認することができた。			
					C	点検がきちんとでき、必要に応じ修繕・修理	また生徒の成績や文書の取り扱いなどについても、危機管理の視点からマニュアルの中に盛り込み、危機管理マニュアルを見直し、改善を図りたい。			
					D	点検はきちんとできたが、修繕・修理が不十分				
A	危機回避の講話、実習等の実施で安全意識が向上	危機回避力習得のための講話、実習等で、生徒の安全意識の向上を図る。特に、自転車通学生の交通マナーを遵守させる。消防署等と連携した計画的な避難訓練を実施する。	学校事故、交通事故や薬物乱用等の防止教育を徹底する。	危機回避力習得のための講話、実習等で、生徒の安全意識の向上を図る。特に、自転車通学生の交通マナーを遵守させる。消防署等と連携した計画的な避難訓練を実施する。	A	例年1学期に交通事故が多発するため、入学前の新入生説明会でも自転車の乗り方について指導を行うとともに、事前に練習を行うよう呼びかけを行った。また、入学直後に警察の方を招き、講話を行うとともに、学校周辺での乗車練習を行った。その成果もあってか、登下校時の交通事故(自動車との接触)は1件であった。しかし、自身による転倒による怪我は数件発生した。	B	B	年度当初の新1年生の自転車の運転は非常に不慣れで危ない場面も例年多々見かける。通学路での定期的な街頭指導の必要性を感じた。また校外については学校だけの指導に限界があるので、家庭と地域が連携して、危機回避の情報交換が必要と思われる。今年は自転車による大きな事故がなかったことはまず安心である。交通事故が減ったことは指導の成果だと思いが、自転車乗車時のルールやマナーを守るのにはなぜかを生徒自身に気づいてもらいたい。毎年自転車のマナー向上の指導をなされているが、下校時や休日などで並進や一時停止無視、ノーヘルなどの生徒を少なからず見かける。地域の方からもご指摘があった。また通学路の危険箇所の把握を生徒や保護者も一緒にを行い、警察や行政への改善要望をするのも必要と考える。避難訓練は、生徒も真剣に取り組んでいたことは評価する。今後いざというときに素早く行動に移せるような場面を想定しながら実施していただきたい。	
					B	危機回避の講話、実習等を実施				交通マナーについて、まだ並進や見えにくいところのノーヘルがあるなど、まだ完全とは言えない点もあるため引き続き安全指導を行ってきたい。
					C	危機回避の講話、実習等を一部実施				避難訓練については、1学期は火災を想定した訓練を行った。多くの生徒が真剣に取り組み、良好な避難態度であった。
					D	危機回避のための講話、実習が不十分				薬物乱用防止については、保健体育の授業で扱うとともに、3年生については3学期に外部講師の方から講話をしていただく予定である。

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準	自己評価		学校関係者評価		改善策
						達成状況	評価	考察	評価	
⑥ 特別支援教育	校内・個別支援体制の充実	特別支援教育の校内体制を整備し、個別の教育ニーズに対応した指導・支援を充実させる。	個別の指導計画及び個別の教育支援計画により、支援を充実させる。	個別の指導計画や個別の教育支援計画を遂行する。	A 個別の教育支援計画、指導計画を遂行し、成果が表れた	通級指導教室利用者、特別支援学級在籍者及び保護者から要望があった生徒を対象に個別の教育支援計画・個別の指導計画を作成し、指導支援の充実を図った。個別の指導計画については、毎学期ごとに担任が目標の作成や評価を行い、特別支援教育コーディネーターで目標設定の仕方、評価の観点等を個別に相談にのった。個別の指導計画で設定した手立てが有効であった生徒がいる一方、あまり効果が上がらなかった生徒もいた。実態把握の方法を再検討し、効果が上がるよう一層の指導の充実をめざしたい。	B	特別支援教育は長期的に取り組む必要がある。3年間しかない中でわずかででも有効であったと評価できる取組があれば素晴らしい。様々なケースの支援を必要とする生徒は年々増加傾向にある。そういう現状の中で、一人一人の生徒に対して、将来の進路を見据えた個別の支援計画を作成し実施していただけることは大変評価できる。支援の効果が見られた生徒がいる一方、あまり効果が上がらなかった生徒もいたのは残念である。特別支援コーディネーターの指導のもと早急な支援計画の練り直しを望む。また個別支援の成果に関しては、保護者の協力があってこそなので個別の対応を慎重かつ丁寧に行ってほしい。	B	来年度も引き続き、個別の教育支援計画及び個別の指導計画を遂行したい。特に作成にあたって本人、保護者の希望を丁寧に聞き取った後、実態把握を多角的な視点で行いたい。また、全教職員への周知徹底、目標に対する達成状況を学期途中で確認することにより、支援が適切に行われるような体制づくりをしたい。また、特別な支援を必要とする生徒を学力テストや生活態度から早期に把握し、素早い対応に繋げたい。
					B 個別の教育支援計画・指導計画を実行した					
					C 個別の教育支援計画・指導計画を実行したが、計画の改善が必要					
					D 個別の教育支援計画・指導計画を実行しなかった					
⑥ 特別支援教育	関係機関との連携、他校との交流の推進	教育、医療、福祉等の関係機関と積極的な情報交換を行うことにより、連携を強化する。	医療、福祉等の関係機関、近隣の特別支援学校と積極的な情報交換を行う。	関係機関、近隣の特別支援学校等との定期的な連絡体制を整える。	A 月1回以上の定期的な連絡を行い、支援が充実	月1回以上、受診同行や近隣の特別支援学校、浜田教育センター、浜田教育事務所の巡回教育相談、本校教員による関係機関への訪問を実施し、特別な教育的ニーズのある生徒に対する実態把握や支援について各機関から助言をいただいた。特に新任の特別支援学級担任に対してはほぼ毎月関係機関や保護者に来校していただいた結果、自立活動の内容が充実してきた。また、医療、福祉、教育の関係者を招いてケース会を開いた。各関係機関ごとの役割分担が明確になっただけでなく、学校ではできない支援について引き受けてくださる機関があり、きめ細やかな支援の実施が可能になった。しかし、連絡体制づくりができたのは、一部の生徒に対してのみにとどまった。特別な教育的ニーズのある生徒すべてに対して、関係機関との連絡体制を築いていきたい。	B	専門性を有する教員の配置により関係諸機関との連携がより密になってきている。また医療・福祉・教育関係者を招いてのケース会議を例年よりも多く開催し、特別な教育的ニーズを持つ生徒へのきめ細かい支援体制を構築できたことは大いに評価できる。また新たな支援を引き受けられる機関との連携ができたことは大変な成果である。また新任の特別支援学級担任に対しても関係諸機関との連携が充実しており、生徒や保護者に安心して学校生活が送れていることは素晴らしい。今後も生徒が安心して学校生活を送るために関係諸機関との情報交換を活発に行ってほしい。	B	来年度も地域の関係機関との連携を月1回以上行いたい。特別な教育的ニーズのある生徒に対するケース会は現在すべて特別支援教育コーディネーターが関わっているが、学年主任を中心に特別支援教育への意識が高まってきていることから、コーディネーターは同席せずに学年部主体のものも開かれていくよう働きかけたい。そうして、今まで支援の行き届かなかった生徒に対しても関係機関との連携を推進させたい。
					B 月1回以上の定期的な連絡					
					C 学期に1回以上の連絡					
					D 連携、連絡とも不十分					
⑦ 研修	校内研修の推進	校内での研修を計画的に行い、授業力の向上に努める。そして、生徒の「つながる力」を育成する。	校内研修の充実により、授業力の向上をめざす。	授業改善アクションプランの3つの具体的取組①「振り返り」の工夫、②自分の考えを伝え合い、深め広げられる話し合いの場の設定、③今学んでいることが自分の将来、社会とつながっていることを意識できる授業づくりをもとに授業実践をすすめ、校内研修を計画的に行い、教職員どうしが学び合う機会をもうける。	A 1人1回以上の公開授業の実施により授業力が向上	学校評価での「授業研究に努め、授業力の向上を図ることができた」の肯定的評価の割合、前年度からの変容は、1学期は94%→100%、2学期は100%→100%という回答であり、全ての教員が授業力向上を図ることができたと回答している。教員アンケートで「自分の考えを伝え合い、深め広げられる話し合いの場の設定」が「できた」・「少しできた」教員は約83%、「次の授業や家庭学習にいかされる『ふり返り』の工夫」が「できた」・「少しできた」の回答は約74%、「今学んでいることが、自分の将来や社会とつながっていることを意識できる授業づくり」が「できた」・「少しできた」の回答は約91%であり、指導方法の工夫がすすんでいる。キャリアパスポートの「つながる力」をみる設問で1学期から2学期への生徒の変容をみると、「周りの人の意見を聞く時、その人の考え方や気持ちを受け止めようとしたか」の「よくなった」の回答が1年生で49%→56%、2年生で40%→48%、3年生で78%→76%、「相手が理解しやすいように工夫しながら、自分の考えや気持ちを伝えようとしたか」の「よくなった」の回答が1年生で36%→49%、2年生で26%→39%、3年生で57%→63%、「自分から役割や仕事を見つけ、分担するなど、周りの人力を合わせて行動しようとしたか」の「よくなった」の回答が1年生で36%→67%、2年生で26%→55%、3年生で57%→74%となっている。2学期を終えて、少しではあるが、「つながる力」に対する意識が高まった生徒が増えている。また、授業で「つながる力」をつける実践が定着しつつある。今後は、より多くの生徒が互いの考えを伝え合い、深め広げられるように「話し合いの基本形」の活用実践とその紹介をすすめたい。	A	教員の指導方法に工夫がみられ、授業力の向上ができており、3年生のアンケート結果からも、「話し合い、振り返りがよくできている」という評価が伸びている。公開授業や校内研修などを通して教員同士が切磋琢磨し、授業力の向上に数字としても表れてきたことは大いに評価したい。生徒の「授業内容がよくわかる」という評価が多くなっているのは教員の努力の成果である。今後も引き続き頑張ってもらいたい。またキャリアパスポートの「つながる力」に対する生徒の意識づけも徐々にではあるが高まりつつある。授業改善アクションプランのすべての授業を通しての実践が効果を発揮できていると思う。学びが将来自分にとってどのように役に立ち、社会に貢献できる人になっていけるのかを授業を通してお伝えしてもらいたい。	A	授業改善アクションプランの授業改善の3つの柱を全教科でより意識した取組を続けていく。言語活動の充実のためには、1人1人が自分の考えをもつことが大切となる。考えを持つためには基本的な知識が必要となる。授業での「振り返り」を工夫し、家庭学習の充実につなげ、基本的な知識の定着をすすめていく。また、今学んでいることが、自分の将来や社会とつながっている例を授業で紹介し、学習意欲の向上にもつなげたい。先生方の授業力向上意欲の高さを活かして、「ふり返り」や「自分の考えを伝え合い、深め広げられる話し合いの場」、「学んでいることが、自分の将来や社会とつながっていることを意識できる取組」等を情報交換し合うことで「言語活動の充実」にむけた授業改善をすすめていく。
					B 1人1回以上の公開授業を実施					
					C 公開授業を実施					
					D 公開授業を実施できなかった					

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準	評価		学校関係者評価		改善策
						自達	己成	状況	評価	
⑧ 保護者、地域住民等との連携	情報公開の推進	学校教育の内容や計画を広く情報発信する。	学校だより、学級通信等を定期的に発行し、ホームページの更新を適宜行う。	年間計画に沿って、学校だより、ホームページ等で定期的に情報を提供する。ホームページについては、載せる内容について教職員から意見をもらい充実させていく。また、メール配信システムを緊急連絡だけでなく、諸活動の案内としても有効に利用する。	<p>A 学校だより、学級通信、HP等による有益な情報を定期的に発信</p> <p>B 学校だより、学級通信、HPを定期的に発行・更新</p> <p>C 学校だより、学級通信を定期的に発行、HPは時々更新</p> <p>D 学校だより、学級通信を定期的に発行、HPは更新できず</p>	<p>今年度も、HPは毎月1回の学校だより、月の行事予定表を定期的に更新することができた。しかしながら、その他、生徒会活動、部活動の大会結果報告、玉江大会等については新型コロナウイルス感染症のために開催されず、活動の様子を発信することができなかった。</p> <p>活動が自粛される中、HPでは伝えられない内容については学校だよりの中に掲載され、各学年様子については学年主任や各学級担任が通信を作成して伝えることができた。</p> <p>昨年度HPから校歌を聴くことができるようにしたが、本校第5期卒業生の方から自作でアレンジした江中校歌の楽譜を送付して頂くなどHPの影響を感じることができた。さらに、より効果的に、広く地域の方にも伝えられるように取り組みたい。</p> <p>メール配信システムについては、緊急時以外(部活動、参観日など)にも利用することができた。紙媒体でのお知らせに加えて、メールを発信することで、提出物等の連絡が確実となり、効果を上げることができた。</p>	B	<p>多くの学校行事の自粛の中、本校からの情報発信も今年も学校だよりの発行やホームページの更新は計画通りできており、いろいろな情報を的確に得ることができた。また、ホームページで校歌を掲載した結果、卒業生から思わぬ反響をいただいたことはこれからのホームページでの発信の影響を感じさせた。ホームページの有効な活用がほぼ確立されてきたが、ホームページに掲載する内容について、生徒や学校関係者などからの情報や意見などを取り入れた利用ができないだろうか。今後より一層の充実を望む。紙媒体とメール配信システムの併用により、保護者等への連絡がより確実となったことは有意義であると思う。メール配信システムの有効な活用によって、緊急時のみならず学校の諸活動の連絡にも役立てることができたことは喜ばしい。今後も全教職員がスキルを身に付け、確実な情報発信につなげていってほしい。</p>	A	<p>次年度においても、月の行事予定、学校だよりの公開は定期的に継続していく。さらに、今年度公開できなかった、学校でのトピックスや部活動、生徒会活動での情報発信を積極的に行うようにする。</p> <p>メール配信システムは、緊急時以外でも積極的に活用できるように、職員全体に周知していく。</p>
	学校間の円滑な連携・運動の推進	異校種間の連携・運動を図り、生徒の人間力の向上を目指す。	幼小中高の連携・運動を密にして、学校間の円滑な連携に努める。	幼小中高との交流・情報交換会、授業公開を積極的に行う。また、異校種間の共通課題の克服のため保護者への啓発活動をより進める。	<p>A 幼小中高の計画的な交流により連携が充実</p> <p>B 幼小中高の計画的な交流を積極的に実施</p> <p>C 幼小中高の交流を実施</p> <p>D 幼小中高の計画的な交流が不十分</p>	<p>中学校区内の小学校との交流については、今まで2月に行っていた出前授業の形態を変えて、10月に中学校に集合する形で「授業・部活動体験」を行った。小中連携のための組織を発足させて、行事などの調整を行う教務部会、キャリア・パスポートの連携を図るふさど・キャリア教育部会、特別支援教育のスムーズな接続を図る特別支援教育部会がそれぞれ開催された。</p> <p>例年続いている江津中校区全体で行ってきた「ネット利用の家庭内の約束」づくりは、新たに江津市全体で取り組むこととして新しいチラシを作成し、情報モラル講演会などでも啓発を行ったが、コロナの影響もあり保護者、地域への啓発は十分に行うことができなかった。</p> <p>高校との連携では、運動部の交流を引き続いて行った。幼稚園とは、職場体験や保育実習等で充実した交流ができた。</p> <p>生徒指導面の連携では、生徒指導主事、主任同士の学校警察連絡協議会での情報交換や、月例の校長会、教頭会等で情報や指導事項の共有に努めた。</p>	A	<p>校区内小学校の6年生が中学校に集まる形で「授業・部活動体験」を行ったのは新しい試みでよいと思う。また、中学校区の小学校との小中連携を図る組織を立ち上げ、各部会の会議が活発に開かれたことは大いに評価できる。この組織がより有効に機能していくように充実させてほしい。キャリア・パスポートについては、上級校との連携となるので、子どもたちのためになると思う。期待する。「ネット利用の家庭内の約束」は江津市内小中学校で取り組むことになった。形骸化しつつある現状からより有効な見直しを図り、PTAと連携を密にして約束がきちんと守れるような取り組みを改めて構築してほしい。ネット利用の問題は低年齢化していて、小学校でも問題になっている。小学校との連携をより強化していかないとますますトラブルが増加していく危険性を感じている。保護者も含めての更なる情報モラル教育を望む。幼小高との連携・交流は徐々に深まっていると感じる。今後も情報交換を密にして、これからの子どもたちの健やかな成長のために役立てていってほしい。</p>	A	<p>中学校区内の小学校との交流は、小中連携の組織ができたことで、年度当初から計画的に連携を進める体制ができた。今後は、部会での連携をより密に取ってきたい。</p> <p>情報教育に関しては、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、十分な啓発を行うことができなかったが、次年度はGIGAスクールでの情報教育を計画的に進めるとともに、より一層の啓発を「ネット利用の家庭内の約束」の利用を図ってきたい。</p>

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準	自己評価		学校関係者評価		改善策
						達成状況	評価	考察	評価	